



四万十町
町内ぶら〜り散策

下津井い

旧 大正町の北端の集落である。田野々の街から梶原川沿いに20km、車で40分ほど北上したところにある。もう少し行くと、そこは梶原町であり、西方の山を越えると、旧十和村の大道である。

下津井は、蜚の名所であり、野鳥の宝庫であり、さらには、知る人ぞ知る「ヘラブナ釣り」の名所でもある。連休などには、遠くは関東方面からも太公望たちが訪れるという。

それから、下津井の風景を語るときに欠かせないのは何と言っても「めがね橋」である。このめがね橋は、昭和19年にできた森林軌道で、林業が盛んな頃は、奥の森林で切り出された材木を貨車いっぱいに積んだトロツコがこの軌道を通って、田野々の貯木場まで運んでいた。それについてはよく知られているが「実はこの軌道には先代があった」ということは、この地区以外の人には、あまり知られていないのではないか。津賀ダムができるまでは、この軌道は、もつと「下」を走っていた。ダムができることで、軌道が水没してしまうというところで作られたのが、このめがね橋である。津賀ダムの完成を受けて、その年にめがね橋も完成したのである。

下津井の林業の歴史は古い。これだけの山の中の地区であるから、人々は太古の昔から山と共に生きてきた。江戸時代、林産物は土佐藩の財政の大きな収入源であったため、藩は良質の山林を「御留山」という名で指定し管理した。上山郷（今の旧大正町分）にあった御留山のうち、実に



きれいに手入れされていることがうかがえる
仁井田神社

4分の1がここ下津井にあった。当時の記録には、材木だけではなく、椎茸や、炭や、薪など、さまざまな林産物が出荷されていたとある。地区の方によると、戦後も、さまざまな林産物が取引されていたということである。和紙の原料となる楮（コウゾ）やミツマタは、峠の向こうの大道を経由して十川へ。十川泉貨紙になるのである。また、ワラビの根っこを叩いて粉にした「ワラビ粉」を多くの家で作っていて、これは中村の傘屋さんたちが買い付けに来ていたそうである。傘を張るための糊として重宝されたのである。

下津井の集落には、もともと複数の神社があったが、今は仁井田神社に合祭されている。この仁井田神社では、毎年、牛鬼が行われ、無病息災を願って各家々をまわる。花取り踊りも絶えることなく行われているそうである。

この山深い美しい郷・下津井には、現在65人、38世帯の人が暮らしている。

町のうごき

(9月30日)	人口	前月比	出生	死亡	転入	転出
男	7,870	-8	男 3	16	12	7
女	8,660	-13	女 3	16	11	11
計	16,530	-21	計 6	32	23	18
世帯数	8,378	-1	(9月中の届出)			

窪川地域 11,679人 大正地域 2,308人 十和地域 2,525人

四万十川の 水質状況

	適正值(mg/l)	10月1日
リン酸	≤ 1.0	測定範囲以下
硝酸	≤ 0.5	0.485
アンモニウム	≤ 5.0	測定範囲以下
アニオン活性剤	≤ 1.0	0.30
化学的酸素要求量	≤ 10.0	2.311

調査：大正（吾川）

資料：四万十高校自然環境部

四万十町通信

2020.11月号

Vol.176 (毎月10日発行)

●発行／四万十町企画課

●印刷／窪川印刷

〒786-8501 高知県高岡郡四万十町琴平町16-17

☎ (0880) 22-3124

FAX (0880) 22-3123



本文など内容の一部に見やすく読みましがえにくい
ユニバーサルデザインフォントを採用しています。